

# じょうこうじ 掟光寺だより

令和元年  
6月号

あいさつ

近年、ペット葬式の需要はどんどん増えていきますね。日本人がペットを弔ってきた歴史は結構古く、4〜5世紀頃、応神天皇が獵犬を埋葬したのが始まりと言われていきます。

日本人の供養する心は犬や猫だけに留まらず、日本各地にはあらゆる生物や無生物の供養塔があります。例えば、和歌山のくじら供養祭、浜名湖のうなぎ観音、北海道のバツタ塚、立石寺のせみ塚、食用カエルの供養塔、微生物の菌塚、害虫の駆除会社にある害虫供養塔など、哺乳類から微生物まで供養塔は存在しています。また、東北には草木塔という草や木の慰霊碑もあります。さらには無生物である人形、針、筆、包丁など「モノ」の供養も日本人は行っており、私たちの供養する心・慈悲のこころは留まるところを知りません。

近年では犬は犬でも「AIBO」の葬式をしているお寺さんもあります。今後「AI」の発達と伴い、「ロボット供養」が一般化する時代も近いかもしれませんね。



行事案内

●「宗祖報恩講」  
6月 9日(水)

19時00分から

他寺の千部会がございませので、夜に行きます。時間をお間違えの無いよう、お参り下さい。

## たど 仏教譬え話

【宝を数えている間に】

人生・苦楽・欲

ある大富豪の家に一人息子がいたが、なにぶん道楽者なので、父親は心配でならなかった。やがて父親は重病にかり、死期が近づいたことを知って、息子を枕元に呼び、「わしの財産はすべてお前に譲るが、どうかこれを大事に守って無くすことがないようにしてくれ」といい遺して、亡くなった。

しかし、息子は遺言にはしたがわず、金を湯水のように使ってしまったので、

家業はあつという間に傾き、財産はすっかり散逸してしまった。老いた母も苦悩のあまり病の床に臥せ、子の行く末を案じながら、この世を去った。

こうして息子は寄る辺のない身となり、山に入って薪を拾い果実を採り、これ売ってかろうじて糊口を凌いでいたが、ある時、雪が降ってきたので石窟の中に入って休んでいると、洞窟の中に、昔、国王が隠しておいた宝がどつさりあるではないか。

落ちぶれた息子は宝を見て大喜びし、「これだけの財宝があれば、豪勢な家も買える、嫁ももらえる、馬も召使いも何でも買えるぞ」と胸算用して飽きるこがなかった。ところが、この時山賊の群れが鹿を追ってこの石窟の前までやって来た。彼らは洞窟の中で貧しい男が金を数えているのを見て、鹿はどうでもよくなり、中に押し入って男を殺し、金を盗ってしまった。

まことに愚かな凡夫はこのようである。親が善根功德で積んだ財宝を、現世の大欲のためにすべて失い、無一文になって深い山奥に行っても、欲を捨てるこがなければ、閻魔の死者という賊がたちまちに襲い、何より大切な命を頂戴しに来るのである。



〈大乘本生心地観経〉

## くらしの仏教語

機嫌きげん

「ごきげんよう」「ご機嫌をとる」「機嫌を直す」「ご機嫌うかがい」など機嫌は「気分のおよしあし」をいう日常語として、よく使われています。

元々、機嫌は「譏嫌きげん」と書く仏教語でした。譏嫌とは、譏は「そしる」「嫌は「きらう」という意味なので、他人からそしりきらうこと、世の人たちが嫌悪することを言いました。

仏教の戒律の中に、「譏嫌戒」という戒めがあります。例えば、「酒を飲むな」「五辛を食うな」など、行為それ自体は罪悪ではないが、世の人たちからそしり嫌われないために制定されたそうです。人が不愉快に思うことはしないという戒律でしょう。

「譏嫌を獲る」という語句も仏典にあります。他人のそしり嫌うことをしないうという意味で、現在私たちが使っている「機嫌をとる」と同じだということです。

元々、「そしり嫌われない」ことを戒める意味だった仏教語が一般に使われ、気分とか心持ちの意味に変化していったということです。